特別
13.
3521
1

特
門 13
號 3521
卷 1

淀屋
辰五郎

播

長谷川のぶ
りまち

昭和二十九年
七月九日
購求

○淀屋形金雞新話序

○もとしゆうこと孔曹操と人当人を絹糸

○蜜をるく昆ろ落ふいろ〳〵表蜜をたう

○ろの絹蜜蜜らろ名つ者ろ孔とかや此了孫

○大江戸孔岳真子と人当人井戸屋何ろ

○家ろの黄雷孔雞の故事をひろ孔ろ〳〵一記

○の冊ろをたろ金雞新話と名つ者ろ出の

○もろ弁ふはりきをとゝ死ぬと聞きそうら

○死ゝき見れば丈法ゝぎゝ多くみ多ぬの

○孫のゝ多はきゝ多ぬ抜ゝゝかぐやぬとゝ

○彼朝臣(カノトウジヤウ)の髭(タイ)れぬ死ぬこゞみもをゝ抜ゝゝぎる

○ぬゝゝ抜ゝゝみがゝゝ多る書(フミ)を法ゝる文(コト)元素(モトヨリ)かゝゝ

○孫(エ)をかくゝと亦(マタ)ぬかゝゝ多業(ワザ)ゝふゝを斯(カウ)ふゝ門

○ふがゝゝ死ゝ孫(オドロ)くはゞみぬ死せゝ死ゝゝ

○ゝゝ多る矛を横(ヨコ)ゝゝ待を賊次ゝゝ吟(ヨム)ぬ歩ゝ人

○死ぬ人ぬゝ抜ゝと抜の色を此死ゝを太抜抜ゝ

○ゝ死ぬ死ぬを抜ゝ多死ゝ

○

阿波の國人　六ゝ周　主人

○

○

○天保ゝ死ゝ抜ゝ月

第一の巻目録

○ 二幼約婚姻　毒井一滅金　閣中得名水

○ 古井再滅金　剛盗奪黄金

第二の巻

○ 茨賊殺主人　縣使捉奸賊　強賊悩諸家

○ 大滝捜剛盗　奸賊獄逃去

第三の巻

○ 悪婆欺孝女　雪児改吾妻　得金衆人損

○ 殺老婆奪金　勤徑脱卯木

第四の巻

○ 鎮怪異得金　卯木仕縣令　好士逢佳人

○ 宅原逞医術

第五の巻

○ 滝五逢吾妻　滝郎趣花生　前世緑難断

浪花の里の大賈人
井戸屋滝右エ門が
一子滝五郎
情を
井戸もとよ
呼やこう花の
そこの升はてゝ
言茶菴

神嵩の
曲痛
遊君茨木屋の
吾妻
沮耳生留以破楽
我明登仍吾妻母
於幾餘可計路渡
斗黎乍奈久何爾
金凉舎

浪華の郷九老医

宝原高爾が

一女小笹

松の琴

合する

尚おもし

ある世人の

小さくかやまち

花笑林

縣令官

大滝左門之佐の愛臣

卯木佐和弥太

ちかくこ紀

萩九

かまゝ弥の

多りかゝも

ちくたちく

花うつ木うめ

神竜園

淀屋形金雞新話附言

○ 此書原二十余丁に巻にも編べきころにて趣向を取む次

○ ひたすらに書肆そぐろに十巻にせん支をろふ止支ふくろ

○ 然あるに然だ牛に頭を拘の尾にたぐる若し趣向を溢

○ あぐ〳〵言に紫を太渇したり所謂思ひ余りて詞なし

○ 次とを此支あり管客能その心を得玉ひてあるべざる

○ を補ひて渡とり玉ひん支を願ふにて作者伏稟

淀屋形金雞新話卷之壹

東武 岳亭主人戯編

閣中得名水

足利尊氏将軍權威海内ふ震ふの時ふいたりて諸國へ軍兵を催し〳〵ろるの節いりても井戸滝之進といへる者を連させられるくり此滝の進い井戸を穿てふ効をえられる者ふ也とび常ふ軍中ふ引よせ也紀倘城をせめて落さるる紀此滝の〳〵んふ命じて城外ふ井をほり〳〵せ此井底よりう横穴ふ城内へ入城の中の井の水を底へ流し去るむ斯ふ城中水ふ渇して苦しを竟ふ

尊氏へ降参是をもて滝の進ん尊氏公の御おぼえも
最めでたく高禄を給わり井戸をめて氏とゝ〻ぬ御代
全くをさまるの後滝の進ん仕へを辞し民間ゆたゝ浪漫
の郷ゆ移つまさて市人の数ゆまゝらくと何壹ツとの
かゝる数代郷土のごとく連綿とゝてたゝけり斯て星霜
物換つて人皇百有四代後五御門院の御宇文明十一年
足利義政公職を義尚公ゆ譲て東山東求堂ゆ退
隠まゝく銀閣寺を造り専ら天下の珍器古物を集
め日夜茶叟をもつて楽とゝ〻ゝ這銀閣の結構ハ
ゝゝく辞ゆ尽し難し雲を凌く二重の高楼ハ潮音閣と號

け後の山を月待山と号ス其他庭前の怪岩奇石衆手
とゝく其壮観目を驚ス程たゝ〻ゝ然ハ此処を
宇治鴨河ゆ遠く山水のゝゆゝて茶ゆ慮べ紀名水ゝ
ゝ〻れば義政公深く是を愁ひゆび普く天下ゆ命じて
宜水脉を知て掘當ん者あゝゝ褒美ハ望ゆ任さゝへ紀
諸国へ属託をめて觸流しゆゝゝゝゆ津の国雑波
の里ゆ井戸屋滝右エ門とのゝ者あゝ渠ハ先祖ハ往昔
足利尊氏公ゆ仕へゝ井戸滝之進定貞と呼るゆ者の
末ゆて其家ゆ秘書有て井をゝとゝゆあいての此滝の
進ゆ越るの侍ひゝと言上ゆ及ぶ者あゝゝれば義政公

このめるゝに情いせらるゝひ立地ゐ浪速へ御使をつかわ
又彼滝右エ門を召て庭前の光景をゑんせらるゝひ名水
を得べき術やあると問せめひろのが滝右エ門命うけ玉
つゝ借地理を考へ謹で言〳〵あげるゝ此処きわめて山
間ゐ〳〵て鉄氣多く茶ゐ應ぜ水を見めんと難〳〵
といへる又頗る見る処あり東南の間の岩を砕ひ〳〵ぐ
清泉を得んと有べく侍りんとぞ言けゝ義政公ゝ
頷て滝右エ門ゐ其旨を命じゝゐ滝右エ門い委細領
美〳〵て直ちゐ数妻の人夫を以て月待山の麓ゝ岩頭
を切破き数日をつひや〳〵穿ちゝれど立地清泉涌出し

て拾も月待山より出る月を洗ふが如く一入庭前の風
景ゝも添〳〵ゝゝば義政公の御よろこび大ゝゝゝ是を
洗月泉と名づけ厚く滝右エ門を褒ひ恩賞許妻玉
つゝゝゝゝゝゐ唐土玄宗皇帝楊太真と俱ゐ沉香
亭ゐおいて愛〳〵ゐひ〳〵黄金の雞あり是ゝと先将
軍義満公の時大明国へ金帛若干を遣ゐ〳〵て好き
むさびゐひ〳〵折ゝ〳〵建文皇帝より贈ゐゐ処ゐ〳〵て
代々足利の宝蔵ゐなきゝあり〳〵ゝ滝右エ門が此度の
恩賞ゐ賜ゝゝれが滝右エ門い面目を施〳〵難波の里ゐ
立還り彼黄金の雞を我家の庫ゐをきゝゐ深く秘蔵

〜あたらろる

二 幼約婚姻

其頃京洛ゆ八幡の中将時教卿と号〜〜らてまろる御方おま〜〜まゝけるゞ近ろころ淀の一邊ゆ一箇の別荘をゆとるとあひ山海の奇石諸山の名木をあつめて造まゝけ水軸車をゆて外川の水をとろ泉水築山残ま〜〜く整ひろれゞ寔ゆ奇麗の壮観ゆ〜て目を駭ろたろうろ土地の人民これを見て駭き賞〜倬号して淀やろとろん呼ろ〜けゝ中将どのゝ若君御二方おを〜〜まゝけゝ一人ゝ北の方の御腹ゆて金若丸と名づけ

玉ひ第君ゝ玉若どのと号て妾腹の御子ろゝ妾ゝ玉若おを養ひ育めゝゆ此玉若おひ立ゆ従ひ顔ろ〜ち清ろうゆて玉を欺〜〜あろうさゆろれゞ中将どの只管ことを愛〜〜あひろを北の方ゝ又平天玉若君を西ゆまゝせゝひ時ゆゆとて〜〜醜〜き御みろゆも有ろゆゞ中将どのも是をいぶせく思ひゆひ詮術ろ〜〜て玉若と乳母めろとも淀のゆろゆ移〜〜住ゝせおろ北ろる同じ淀のゆとろゆ松倉文吾とのゝろる郷士ゆろ家とを栄えてろしろろん妻の名を佐野とよび一人の女子をまろけ是を雪児と名づく幼ご

ちよう美〜く最も愛ら〜かりゝるを夫婦が悦び大ゝ
み〜ぢ大節ゆ〜て云月てけるが此文吾が妻佐野風と〜らる
縁よう淀のやゝゝ泰うきゝめ時々雪児をのゝ見て玉若ど
の〜御前へのぞゝるゆ奈何ゝる宿世の縁〜ゆや玉若ど
の此雪児を見て殊ゆ悦びあひ打戯れて旋び狂ひあひ
ゝるゆぞ佐野い是ようゝ日毎屋形へのぞゝるを玉若どのい
待ひびあひ余念もゝく〜ぞ旋だれゝる或時中将どの御
出ありしと見て此二人の子が中合よゝ〜く旋ぶを見あ〜つゆ
寔ゆ一對の雛人形のごゝく其睦〜くあそび戯鳥鷺
のあるゝゆ等〜く最も〜愛ら〜見光景ゝるゆぞ中

将どの平天嘆ゞめひ今此二人の子ども中より見
ゆ是揮佛の教のごゝく前世ゆ深き因縁あることゝゆ
此子等成人ゝ〜つゝ後い女夫ゆゝ〜て祭ゝ〜と宣ひ
て御盃をとりて二人の子等ゆ杯をとり交させのひゝゝ
ゆぞ佐野ゝ是を見て且哀ゝかつ悦ぶその日いゆぞ
ゆ到ゝまでゝきぐの御談話まゝし上まの〜せ薄暮ゆ
おのびて御暇を給ひう佐野い御屋形をゝりゝ見て吾
家ゆ帰りゝ夫ゆも此哀を語りゝめを文吾も大いゆ打悦
び未ゝゝゝ〜ぞ思ひゝる斯て后も佐野い雪児をのぞ
きて日ゆく〜屋形へまゝあり玉若どのと雪児が快よく旋

玉ろ

童遊びゆ
玉若
雪児ゆ
疵はくる

ふを見て楽うて暮〳〵けるが或日玉若どの小刀を持て物を切て遊びあひゐるを雪児這よりて其小刀を把て玉若どのゝ渡さゞ上て常ゆゐ見せぬ合を〳〵あひゐるが立地小刀をゐり揚て雪児が眉間を伐つけゐるを雪児いあつと呼びつゝ彼方へ撞と倒るゐる佐野をたゞめ乳母こ〳〵へと衆皆あどろゐて駈よりて抱き起し見れば額ゆ一すぢうゐ斜つゐて血ゆ袋々と流るゝ大きに驚て泣〳〵む人々忙て如何ゆせんと猶豫ところゆ時よく御次の室ゆ御立入の医師まゐるを合せ居るゐけるゆゑ早速ゆ走て薬ゐり旦布をゆて血を拭ひとゐ粉薬をゆて血を止めさるゐ〳〵抱ゐけるゆゑ衛々ゆ〳〵て泣止ゐうさるゐど痛を絶ゐるゐゆ時ゐ〳〵て泣出〳〵けるゆゑ佐野も只管泪ゆゐ頓て雪児をめゐいゐゐ屋形を退ゐ帰ゐけゐ寔や楽を極まゐる時ゆ哀を生ずと古人の金言宜ゐるゐ八幡の中将時教郷ゆ〳〵ゐる風の心地よりて仮初ゆ打臥ゆひゐゐ衛々病ひ重ゐゐゐ行て医癒手を尽せども功験〳〵ゆく竟ゆ逝去まゐ〳〵けるゐゆ北の墓の御数を大方ゐゐば同じ路ゆと歎ゐせゆひゐるを一宗の御方々打會ひゆて万般と慰め恭〳〵せ頭ゐ御亡骸を一團のゐゐゐと〳〵御墓ゆ葬ゐ〳〵ゐ供養

作善ゆゑごろふ執行ひ〜ろうろる斯て累七の法要を
もろ〜をさらら乙〜ろるさ豫て北の臺の惡を居ゆいろう
玉若どのを淀のやろより引とろゆひ何処の者ゆる有けん
或町人ゆ一生不通の證文をそへて遣い〜ゆひろう是余へ
ゆ義ゆ背きろろ御めろゆひろと衆皆眉を顰めけと
とも北の臺い御家の娘ゆて中將どのい入智ゆゆてお
ろ〜ろるゆそ誰有て左右いめゆ犯人もろく口八甘大俊ゆて
打過けり文吾ゆ妻佐野い久〜く屋形へも出おと〜て
雪児ゆ疱の養生〜てありしゆ医療さろゆくと手を尺〜
て薄々疱全く愈ろゆゆ或日又雪児をあい抱きて淀

のやろろ森〜ろろゆ思ひひやゆ屋形ゆい中將どの崩さを給
いてより北の方の御討らひと〜て玉若君をば何処の町
人へろ親者〜ゆの證文をそへて遣〜ゆ〜より固て佐
野い大いゆ駭きやうて家ゆ帰りて夫ゆかくと語ろれば
文吾も是を聞て力を落〜まより万般と人傳をのとめ
て玉若どの〜行先をろろゆ元来北の臺御一
箇の思〜召ゆて討〜ひるひ〜夷ろれば外ゆ者ろ
者もろ〜文吾も竟ゆい問淀て是も又其侭ゆ捨置て
逆ゆ昼月を越ろける

毒井一滅金

彼迅箭ゆゑ[illegible]光陰の移り行き速ふして早くも十
八年の春秋をおくりて雪児十一歳ゆゑ[illegible]けるとき父の文吾
つくづく思ふやう今此処ハ京洛ちかくて頗る繁花ゆゑ似
[illegible]ども此程浪速のうらゆゑ行て見るゆゑ彼処ハ諸国の船つ
きゆゑ追々たん昌の地となるべき土地なり不如今より彼処
ゆゑ移り住て市人の数ゆゑ交ゆゑ活業をなさばいかに繁
昌さぞ[illegible]ならん然れども彼地ゆゑ趣んゆゑと妻のゆゑ或日下子
一人引倡して浪速ゆゑいらっしゃる迎ゆゑ北浜の
東ゆゑよりて一軒の貴家をもとめ出し其主ゆゑあひて百般
と商議をなすに若干の黄金を出して竟ゆゑ此家を買ゆ

ゆゑ四五日ゆゑ逗留せしが一度淀ゆゑ立帰りて許妻の
番匠らをやとひ又浪花ゆゑらゆゑ彼あづかひ得ゆゑ
古家ゆゑさるべき修理を加へる都て一丁ゆゑ余る大家ゆ
ゑ番匠らも大ゆゑ間ゆゑ半季ゆゑ[illegible]ゆゑ普請全
くとゝのひゆゑ妻より淀を引きとりて浪速ゆゑ名を
改めて吾妻屋東作と名乗り文吾ハ原東国の産ゆゑ
を借て斯ハ呼ばるゝけれど斯ゆゑ東作ハ此浪速
の地ゆゑとして一箇の豪家家とよばれ人も尊ぶ敬ひ然
て後又四五年を越るゆゑ娘の雪児十六歳ゆゑ[illegible]けるが
其容貌ゆゑ[illegible]日本の衣通小町

も是をどゆゑあるべかりしと親の心の深く情び遠くゝばよかれ
聟とりて家を継せて楽まあるべやと是のみ思ひて暮しをり或
とき此家の三ぐわの隅より一箇の古き箱を見付ぐるを打
砕きて捨んとゝて中を見るに古き一枚の書ありて
又何心なく読でこれが種々の掟ども写して其奥ゆ吾
家の土蔵ゐ原井戸を埋めて建るこれが数年の後ゐ極
めて崩るとあらるべ必ずも大郎ある品黄白ゐとい
納まべくばとあるゝあり東作是を見て大のゆ駭き是正
ゝ前ゆ住るゝ人の先祖の業の跡ゐるべ然れども今ゐ
土庫の数あるくあるこれが何をさゝて古井の上ゆ建ら

土蔵とも定めがたゝと庭の中の至るゐらゆも商議
けるゆ乾のゐるゐる金蔵ゐ極めて其作るべるも古ゐ
是ゐゐゝぞ其蔵ゐんゐ然あるんゐ金銀を貯へるん
とゐいと危ゝと丈よう奴子らゆ分付て彼乾のゐるゐ土
蔵ゆあるとあゝもる黄白調度の類ひをとり出ゝ俄頃ゆ
巽の方ゆある處の堅固ゆ造るゝ土蔵の裡ゆ移ゝかく
させるゝ斯て半年ばかりも過るゝ或夜半ごろ驟ゝ
き物音ゝて天地も震るゐるの思ひるゝこれゐ家内の
者おどろきおそれ皆一同ゆ起のゝ見てあるとが不測や彼
新ゆ金銀調度を移ゝかくる巽の方の土蔵屋落ること

崩れ落ちて忽ち一箇の塚穴となりゆけり東作をも
め主管奴子ゐ到るまで此光景ゐ悶絶として唯茫然る
たりしが東作主管らをかくて見て云やう是い初め金銀
を納ゐたりし乾のうしの土藏い却て新しる藏ゆで新し
らんと思ひ〳〵巽の藏い彼古井を埋めて建しる土庫ゐ〳〵
て今宵たりしまでも斯崩れ落て五十年来貯蓄ゐたる
黄白を此穴の中ゐ滅しうい是天より為る禍ひゆ〳〵
て奈何とも詮方なし〳〵然れど彼穴の中さぶ〳〵も
とめて把ぐさぐる吏いよもあ〳〵と其次の日より許麦
の奴子ゐ分付て大いなる嶺ゐ太き繩を結つけて穴の裡ゐ

奴子一人づゝ乗せ続参をゐて〳〵させ件の穴の裏へ入り
おろすこと既ゐ五人ゐおよびしる然るゐ井の底よりゐ忽
ち一陣の毒氣ゐ起ありて焦火をゐ起けち奴子どもい
底ゐありてある苦〳〵やと呼び〳〵めて其後音ゐせぬ
ゐうゐ東作い上ゐ在て此邑を囚て怪〳〵やゞて彼嶺
を引揚さしるゐ五人の奴子ら皆毒ゐあるゐ紫のゐゐ
ゐうて死〳〵居しゐ是よりして誰ゐ一人らの井の裡へ入ん
といるものなく東作い嘆息〳〵丈よりゐ大のゐる九本ゐも
て此穴の上ゐ見て〳〵抜を敷双ゐて進ぜどゐけ斯て
又半星余りを過〳〵けり

古井再滅し金

是も又同國兵庫の浦ゆ尼屋木平次とゝいふ豪家あ
り手廣く東国筋へ高ひをさゝる者ゆゑ諸国より
取集めらる金銀を浪速の浦より船ゆつゝて兵庫ゆ飯
らんとせしゝ頃も其日い太く風荒て船の便ゝあしかり
けゝ豫てより心隈なく交らひゝる吾妻屋東作ゞ家を
しのこ黄金三万両を預けあゝ尼屋木平次い奴子ゝ諸
俱旅舍ゆのゝりて宿ゝゝ吾妻屋ゞ家ゆい尼木尼屋木平次を
より預りゝる三万両の黄金奥の客次ゆつゝ置ゝゝ頃
しも師走の半ゆて翌い煤をはらゝんとゝゝ宵の夜ゆのゝ

家内の者ども夜半ゝう起出て家の中をゝゝ行ゝゝゆ
奥客次ゝゝ三万両さがゝゆ邪魔ゆゝゝのゝ主管ども
奴子らゆ分付て奥庭へさゝびいゞさせ井の間ゝゝゝ
彼古井の穴のゝゝゝ抜ゝゝど數て三万金をつゝ車ゆあゝ
然ゝゝて彼是間どゝゝゝ處ゆ雞鳴近きゝゝゆ到ゝ忽ち大
いゆ凄まゝゝゝ音響きて彼古井戸再度崩れおちて
尼木ゝう預ゝゝゝゝ三万両の黄金のゝゝ穴の底へ陷
入ゝゝゝゆゞゝ主管ゝゝゝゝゝゝゝ東作ゝゝゝゝゝ此光景ゆゝゝ
き狼狽唯忙然と井のゝゝゝゆ彷徨十方ゆゝゝゝゝゝ居ゝ
ゝけゝ左右ゝゝて次の日ゆゝけゝゝゝ尼屋木平次奴子あゝ

せの引俱〳〵入来り預け置る三万両を受取〳〵とのひ
るゝゆゑ東作い出迎へて頭かいるゝで〳〵彼古井の怪〳〵を
初めより落もるく物談り考〳〵て昨宵預〳〵黄金三
万両も又古井ゐ陷入るゝ所へ急ゐ把揚んとのと六借〳〵
候ゝるゝと迷惑ゞゐ言〳〵ける屋木平次是を学て
心中ゐ思ゝやう吾妻屋東作ゞ家の土蔵古井の中へ
陷入て若干の黄金をうゝ〳〵ゐ夫より〳〵石い吾妻屋ゞ家
此〳〵く裏へるる様子ゝゝと人の語るを聞ゝ〳〵ゞ借いその
話〳〵ゐ違りゞ東作其身の裏へるゝゐ苦〳〵て不良の
心を起〳〵彼古井の怪ゐ託〳〵て吾預け〳〵三万金を光掘

とゝんとゝるゝゝゝゝ〳〵と忽ち大ゐ怒つて云やう是い心得
ゞゝゝ東作ぬ〳〵の言ゞとゝるゝ九金銭ハ世界の宝ゐ〳〵て
ゝゞゝ一銭二銭ゝゝ大節ゐ把扱ゝゝのるゝゐ況ゝゝや
三万両とりくる大金を何ぞ蔑畧ゐ古井のゝとゐゝ
置つるゞゝや小生い奥の客次へゝゝゝて飯〳〵ゝん古
井のゝとゐい誰ゝゝゞ〳〵怪〳〵ゝ云説聞耳ゝゝゞ
疾〳〵その黄金〳〵戻さゝとゝと威丈高ゐゝて船ゝ
ゝるゝゆゞ東作も面を赤らめ怪〳〵ゝ言説と曰のゝゝ
小生光掘ゞゞのひゝけゝるゞゝく聞えて甚ゝつて笑ゝゝて
ゞ〳〵実ゐ陷ゝんゞゝゝ落ゝゝと言ゝゝゝゐ把揚るま

古井の毒
数夢の人
夫を矢ふ

で待らるゝと言ひ尼木もまぶ〳〵怒つてのゝしり都て
古井ゑどの傍ゆい衆人危みて茶碗ひとつも置ずの
る〳〵然るを那此や他より預りおぼ〳〵二万両を漫りゆ
井の許ゆ置べき戯氣世ゆまゝ多くあるべ〳〵ぶ彼三万
金い京洛将軍家より吾方へ預けらるひ〳〵軍用金ゑ
もとゞ一日もゑくてい淪ぶ疾々返せと呼りゝらゝの臣屋木
平次い将軍家へ御立入きゝる支い東作もよく知らゝけ
ぶと今木平次ゞ偽つて将軍家より預りの軍用金と
のひ〳〵を誠と思ひ木平次ゆ向ひて言けゝい足下の曰くの
ごとく古井の許ゆつゝ置べ〳〵支い実ゆ吾主管らゞ過

ちゝゝ又古井ゆ陷いゝ〳〵ゝる支を虎立言ゑ〳〵ぶ侯へども
将軍家より預りの物と関て捨おぼゝ〳〵然〳〵ぶ旦
吾方より三万両とゝかへて進〳〵ぶべ〳〵井ゆ陷いゝ〳〵ゝる
金い迹ゆて悠々把ゞ〳〵ぶ菱屋〳〵ゝるゆ
べ〳〵ぶとのひつ〳〵主管らゆ八分付て主倉の裡より黄金
三万両とゝ出〳〵木平次ゆ渡〳〵けるとゞ臣木い大いゆ悦
びて頻て許妻の奴子ゆゝれき擯ゆ言過てゝ
夫礼を打咤つ〳〵帰家をつげゝ五吾妻屋を立出ゝる姓
ゑどゝも冬の日の短きを兎や角とせゝ合ゝゝるとゞ今き金
烏西山ゆゝゝぶぶて足下暗くゝゝけゝゆゞ臣木おどろ

偖ハ遅るゝ〜ぞと疾急げと奴子どもをせ〜つ船場をさ〜てぞ駈行けり

剛盗奪黄金

斯て尼屋木平次ハ三万両の黄金を東作より受取て奴子らゐさ〜搗たせ黄昏とゞのゝ〜分ち名古の浦邊より船ゐ積んとする時ゝ〜迹より許多の人音〜て数十人の曲者追蒐来り尼木ゞ太勢の奴子らを散々ゆゝち倒し木平次ハ大いゐ駭き何者ぞと斯る狼藉をゝ〜つゝぞと大音ゐ呼ゝ〜ゝゝを一遍より人の大男走り出木平次をも打倒〜彼三万両を奪ひとり何処ともゝ〜逃去ゝり尼木をたゞめ奴子どもゐ漸々ゐ起あがり近ゝた一遍の賊ゞ家ゐいりて辛ゝゞて火を貰ひ焦火をてら〜て遠近を尋ゑ廻るゐ都て持来つる三万両の黄金ゝゝを奪ひ去る一筋もの〜〜ゞ唯濆邊の松蔭ゐ一口の副刀落てあり把揚てつ〜〜見るゐ椽頭とも黄金の無拾ゆて黄て見覚え有吾妻屋東作ゞ家の定紋香の圖の形をゝり付ゝり偖ハ東作三万両の黄金ゝの一度吾ゐ返〜ゝゝれども其身の仮倆の離蹠ゝゝを無念ゐ思ひ迹より大勢追ゝけ来り吾們を斯打倒〜三万両の黄金を残りゝく奪ひとり迹を暗ま〜逃失ゝるゐ疑ひ

るゝと立地ゐ彼副刀を證據とゝ〳〵て其夜ゐ迅速の浦の厳令官大瀧左門之佐どゝく廳前へ訴へ出るゝが左門の佐どの大紀ゐ駿河ゝ其次の朝まゝ紀ゐ吾妻屋東作を召とり玉ひ嚴〳〵く攻問ゐゝゐ東作ゝ原来知ぬと変るゝけるとゞ其よ〳〵を御咎へゐ及びゝる左門の助再度彼副刀をとり出〳〵玉ひ是ゝ是人も知らゝ你ゞ家の定紋つけるゝ品るゝとゞ極めて你ゞ死持ゝるべ〳〵此物昨夜ゝの場死ゐ落のゝゝゝんが尼木ゞ金を奪ひ〳〵ゝ汝ゞ一家の徒等ゐ疑ひゝる〳〵疾ゝ罪ゐ依とゞ〳〵と曰ひゝるゝゝ東作きいよ〳〵迷惑〳〵て言ゝやゝ奈何ゐも其副刀ゝ小生ゞ持死の物ゐさゝゝくとも丈ゝ去過ゝゝゝ盗賊のゝめゐ盗まゝ〳〵物ゐて候ゝと御咎へ言〳〵けるとゞ左門の佐どゝの又曰ひけるゝ汝副刀を盗まゝ〳〵時兼て訴へちくべ紀ゝるを其変るゝ今改めて盗まゝ〳〵ゐのゝゝと云とも那ぞ又分説とゝるゝ紀や左右且你を獄ゐ下〳〵ゝ紀依ゝ穿議をきゝ紀ゝるゝと丈ゝゝ東作ゝ高手小手ゐ縛めゝ囚圄ゐつゝゞ置とゝる